

9) 血管平滑筋収縮のカルシウム感受性亢進における低分子量 GTP 結合蛋白質 rho の役割

富士原秀善・木下 秀則
西巻 浩伸・国分誠一郎 (新潟大学医学部)
福田 悟・下地 恒毅 (麻酔学教室)

アゴニストによる血管平滑筋収縮は、細胞内カルシウム濃度が一定の状態でもおこる(カルシウム感受性亢進)。近年、種々の細胞において癌化、細胞骨格の変化、分泌、細胞内輸送等に分子量20-25 K の低分子量 GTP 結合タンパクが関与している事が明らかにされつつある。平滑筋におけるカルシウム感受性亢進において低分子量 GTP 結合蛋白質 rhoA が関与しているかをウサギ門脈平滑筋を用いて細胞内における rhoA の動態を検討した。GTP γ S 投与により細胞質にある rhoA は細胞膜へ移動すること、rhoA の ADP-ribosyl 化により、カルシウム感受性亢進は抑制され、rhoA の細胞膜への移動、rhoA と細胞膜上の rhoA の効果器との結合が抑制されることがわかった。

10) 0.25% bupivacaine 使用脊椎麻酔による高齢者大腿骨頭置換術の麻酔管理

山田 雅子・征木 永 (竹田総合病院)
海老根美子・遠山 誠 (麻酔科)

当院では0.25%ブピバカイン使用脊椎麻酔を行っているので、その結果と0.5%例との比較を示す。1995年8月から1997年11月に大腿骨頭置換術を受けた60歳以上の患者34名中、硬膜外麻酔を使用したものもあわせ、約9割の症例で0.25%ブピバカインを用いている。脊椎麻酔単独26例を対象とした。平均年齢は76.8歳、0.25%ブピバカイン使用量は平均3.4 ml (8.5 mg)。鎮痛剤を必要とした症例が6例(23%)で鎮痛剤使用までの平均麻酔時間は2時間38分。平均血圧は27.3%低下し、エフェドリンは14例(54%)で使用、量は平均7 mg だった。0.25%脊麻では、0.5%脊麻に比べ、鎮痛剤が高い頻度で併用されていた。鎮痛剤は麻酔開始から2時間半程度で必要となった。0.25%脊麻でも血圧の低下は0.5%脊麻と同程度認められた。血圧の維持は少量の昇圧剤で可能で、その他の重篤な合併症は認められていない。

11) 長岡赤十字病院にて手術が行われた HIV 陽性患者2症例

本間 富彦・若井 綾子
大橋さとみ・田中 剛 (長岡赤十字病院)
藤岡 齊 (麻酔科)

長岡赤十字病院で手術が行われた HIV 陽性患者2症例を報告し考察する。症例Iは29歳女性。妊娠時検査で HIV 陽性。帝王切開術となった。職員の動揺を考慮し、過剰ぎみの感染防御態勢を取った。症例IIは76歳男性。検診発見の肺ガンにて手術予定。入院時検査にて HIV 検査擬陽性。B 型肝炎ウイルス感染に準じて行った。どちらの手術も事故なく終了した。

HIV 感染患者の治療では、汚染拡大の防止と職員の感染防止に配慮する。各病院で対応方針決定は急務である。また、具体的対策の立案及びそのマニュアル化・針刺し事故等の対処法も立案・マニュアル化が必要である。職員の教育・コンセンサスづくりも行う必要がある。医療費の見直しは計られるべきである。

12) 新しい気道確保器材 COPA™ の使用経験

土田真奈美・丸山 正則 (新潟県立中央病)
佐久間一弘・中山 紀子 (院 麻酔科)

新しい気道確保器材 COPA™ 以下コパを成人患者30人の自発呼吸下全身麻酔に用い、その評価を行った。この結果、挿入が容易で手技修得の必要性がなかった。術中に用手的下顎挙上などの気道確保の追加操作を必要とする症例が33%あった。術後アンケートによる咽頭痛、喉違和感、嚥下困難、発声障害は13%であった。コパ挿入中、舌のチアノーゼのためラリングアルマスクへ変更した症例が1例あった。コパは、脊椎麻酔や硬膜外麻酔を主体とし、プロポフォルなどで軽く眠らせるような、自発呼吸下全身麻酔において、気道確保器材として有用であった。アンケートでは術後咽頭痛等の訴えが予想以上に少なく、また、それほど短時間の症例に絞らなくても使える印象を受けた。

13) HTLV-1 Associated Myelopathy (HAM) を有する患者の麻酔経験

浜江智栄子・小川 充 (新潟市民病院)
小村 昇・遠藤 裕 (麻酔科)
本多 忠幸 (救命救急センター)

HTLV-1 Associated Myelopathy (HAM) は、